

## (2) ストーリー

### 1 創造的市民社会 将来像 1 人と人のつながりで自立と安心を育む

#### ①社会が支える出産・子育て

子育てにかかる経済的負担を社会で担うしくみや、近隣の多世代による育児サポートの広がりにより、育児における孤立感や不安感が払拭され、出産・子育ては社会全体で行うものになり、晩産化に歯止めがかかるなど、出産・子育ての希望が叶っている。

#### 2040年の生活シーン

##### <プロフィール>

- 20代後半の女性。神戸市内のシェアハウスに夫、2歳の息子と暮らしている。
- メーカーに勤務しており、出産後に6ヶ月間の育児休業を取得してから、担当している製品の輸出プロジェクトが新しく動き出すのに合わせて復帰した。入れ違いに夫が6ヶ月間の育児休業に入ったが、息子が1歳になったときに保育所に入所し、現在は夫婦ともフルタイムで勤務している。
- 実家は遠方にあるが、住んでいるシェアハウスには、子育てを終えてリタイアしたご夫婦も暮らしており、何かにつけてアドバイスをもらっている。子育て世帯も多く、息子は他の子たちといつも走り回っていて、子どもたちの仲の良さとパワーはすごい。

##### <出産>

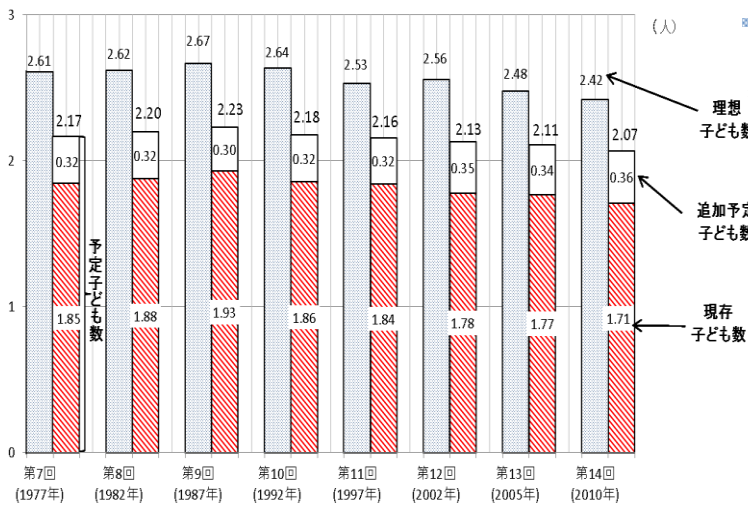
- 妊娠中、つわりに悩まされた時期は、通勤時に気分が悪くなることを避けるために、テレワークによる在宅勤務制度やフレックスタイム制での時差出勤で勤務した。妊婦健診でもアドバイスを受け、体調を維持しつつ、産休に入るまでは担当業務をきちんと行えたと思う。
- 産休に入ってから、区役所から案内をもらっていた地域の子育てプラザに顔を出し、妊娠中や乳幼児の子育て中の人たちと知り合いになった。夫も、ときどき一緒に行って、自分の育児休暇に備えた仲間づくりができたようだ。
- 陣痛が始まったときはたまたま一人だったが、子育てプラザで紹介してもらっていたサポーターさんがすぐに駆けつけて、病院まで付き添ってくれて無事に出産できた。

##### <子育て>

- 子育てプラザには、息子が生まれてからもずっと通っている。プラザではシニアの方々が子育ての相談に乗ってくれて、息子もよくなつており、おじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいるような気分だ。
- 子育てプラザの運営資金はクラウドファンディングで賄われているし、サポーターさんへの謝礼や、保育所の保育料は無償化されている。
- 夫が育児休業を終えてからは、掃除や洗濯をしてくれる家事支援ロボットを購入した。空いた時間で、三人で買い物に出かけたり、公園に遊びに行ったりしている。最近は、絵本の読み聞かせも始めた。私も夫も、できる限り息子と向き合い、一緒に過ごすようにしている。
- 出産前は不安だったけど、子どもの成長を見るのは嬉しいし、2人目、3人目はもっと楽しくなると思う。いろいろな人の支えもあって、安心して楽しく子育てできる。

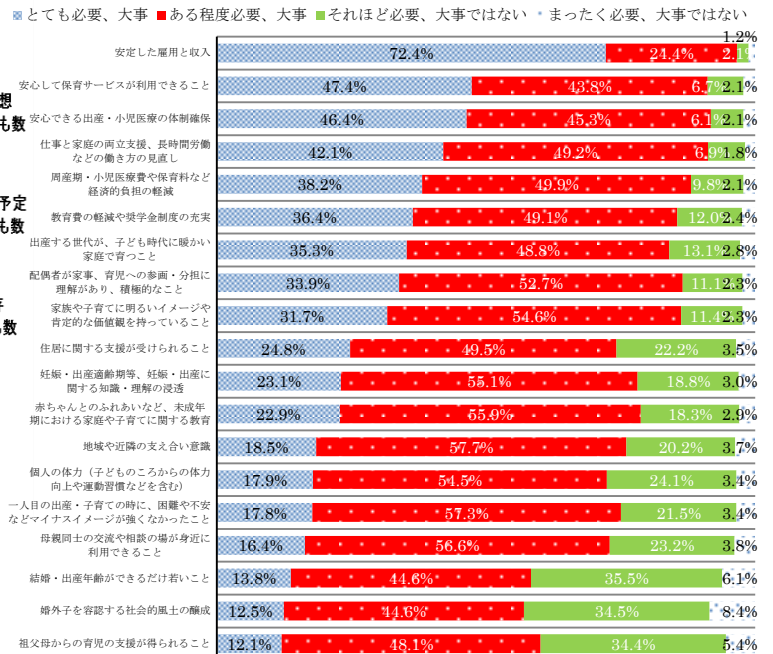
## 現状や課題

### 【平均理想子ども数と平均予定子ども数の推移（国）】



(出典：国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」)

### 【出産・子育てに必要なこと（国）】



(出典：厚生労働省「少子高齢社会等調査検討事業報告書」を基に県ビジョン課作成)

## 見えてきた兆し

### 【多世代交流型子育て支援活動】



※高齢者の持つ資格や経験、趣味、特技を活かした子育て支援活動として、三世代が交流する「あそびのひろば」事業を実施

(出典：ナルク丹波 HP)

### 【クラウドファンディングによる子育て支援施設運営資金の調達】



※全国初となる野外型の子育て支援センターの運営資金（人件費）をクラウドファンディングで調達。

(出典：㈱WESYM HP)

### 【専門家等の意見】

- 子育てに家族以外の人たちをどうやって巻き込むかが課題で、「イクジイ」はまさにそういう手法である。
- 出産・子育てでは、男性の働き方の選択肢を示していくことが必要である。